

GLOCAL



- 樋口一葉文学の世界 愛知 峰子
- パーソナリティ特性と状況の相互作用
一個人差をより診断する状況を探ってー 松木 祐馬



- | | |
|---------------------------------------|-------|
| ■日本語学習者におけるカタカナ語の習得調査 | 田中 章博 |
| ■清末留日学生曾志恣(1879~1929)による『教育唱歌集』に関する研究 | 頼 婉テイ |
| ■ジェンダーを読み解く英語コーパス研究の
出発点 | 杉山 侑姫 |



- 人文学部FD・SD講演会
「学び続ける力」を育むには:
ポジティブ心理学から考える自己調整学習 ——— 三上 仁志



- 第23回「院生の力」を開催
- 第24回教員研究会を開催

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート『GLOCAL Vol.27』をお届けいたします。

本研究科は、1991年に国際関係学部を基礎として創設された国際関係学研究科国際関係学専攻を起源として発足しました。その後、2004年には人文学部を基礎とする二つの専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が合流し、名称を「国際人間学研究科」へと改称しました。さらに2008年には、歴史学・地理学専攻が加わり、現在は四専攻体制のもと、博士前期課程および博士後期課程を整備する研究科として歩みを続けています。国際関係、国際政治、国際経済、社会、文化、メディア、言語、言語教育、心理、歴史、地理といった幅広い分野において、約60名の教員が連携し、指導学生の学位取得に向けて全力で支援しております。

さて、2025年度後半の社会情勢に目を向けますと、日本国内では物価高の長期化や異常気象の深刻化が進み、私たちの生活や社会の在り方に大きな影響を及ぼしています。世界に目を転じれば、ウクライナ戦争やパレスチナ情勢はまだまだ終結の兆しを見せず、加えて、米国によるベネズエラやグリーンランドへの一方的関与や日本と中国の関係悪化など、国際社会は分断と対立が併存する不安定な局面に直面しています。さらに、生成AIをはじめとする技術革新の急速な進展は、教育や研究の方法論そのものを大きく変えつつあり、知の在り方が改めて問われる時代となっています。

このような時代にあって、文化や国際社会への理解を深め、国際的な視野をもって世界で活躍できる人材の育成が、これまで以上に求められています。同時に内なる国際化が顕著な自らが暮らす地域に根差し、多様な人々や文化への深い関心を育む姿勢も不可欠です。本研究科は、こうした認識に基づき、グローバルな視点とローカルな視点の双方を重視する「グローカル」な教育・研究を理念として掲げています。

本誌は創刊から13年を迎え、この間、本研究科における日頃の教育・研究活動の一端を広く知っていただくことを目的として発行してまいりました。国際関係、人文、社会科学の幅広い研究領域を有する本研究科の特色が反映された内容となっており、まさに「グローカル」な視野に基づく研究の実践をうかがうことができるものといえるでしょう。教員と大学院生が同じ誌面を通じて互いの研究成果を共有する機会はきわめて貴重であり、研究科としても、今後さらに本誌の充実を図ってまいりたいと考えております。

本誌を通して、本研究科の日頃の教育・研究活動の一端をご理解いただけましたら幸いに存じます。

2026年2月10日

塩澤 正（中部大学大学院国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 教授

愛知 峰子 (AICHI Mineko)

名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程後期課程単位取得退学 文学修士。専門分野は日本近代文学、とくに明治前期の文学に関心があり、主たる研究対象は樋口一葉の文学である。一葉の「真情描写」「社会的貢献」の志向に注目し、和歌的表現を手掛かりに作品を読み解くことを試みた。著書に『樋口一葉 真情をみつめて』（おうふう、2010）、論文に「一葉・恋歌から恋愛小説へ」（2003）『「大つごもり」の罪と罰』（2006）など。



樋口一葉文学の世界



1. はじめに

晩年の一葉と交流した人々が多いが、『日本の下層社会』の筆者横山源之助もその一人である。横山は一葉宅で話し込んで戻ると、真夜中になって一葉に次のような手紙を書いた。

人生茫々前途は如何遊候やらむと窃に心配申候（中略）当分確実なる見込つき候まで文学者生活御忍耐如何に候やおん談の中ホノメキ候もの看取せられ候故強て此事申上げ候（明治29年2月29日付）
一葉が亡くなる八か月ほど前のことである。横山は彼女が語る中に「ホノメキ候もの」を聞き取り、それは「当分確実なる見込つき候まで」待つようにと記す。一葉は何を考え、語ったのだろうか。

2. 「真情」を描写する

一葉は、小説を書くことについて、次のように書き残している。

我れ筆をとるといふ名ある上はいかて大方のよの人のこと一たび読みされは屑籠に投げいらるゝものハ得かくまし人情浮薄にて今日喜はるゝもの明日は捨らるゝのよといへとも真情に訴へ真情をうつさは一葉の戯著といふともなとかは値のあらさるへき（「森のした艸一」明治25年春）
作品に「真情」を描写したいと希い、創作に取り組む志を次のように記した。

かすか成といへとも人の一心を備へたるものか我身一代の諸欲を残りなくこれにかけ入れて死生いとはす天地の法にしたかひて働かんとする時大丈夫も愚人も男も女も何のけちめか有るへき（中略）わが心はすでに天地とひとつに成ぬ わかこころさしは国家の大本にあり

（「蘆中につ記」明治27年3月）
このように「真情」描写や社会的貢献を志す背景には旧派和歌の歌論があったと考えられる。一葉は14歳で中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門し旧派和歌を学んだ。その歌論には「真情」をありのままに歌に詠み、そうした歌によって人々を感化すること、それは社会や政治にもつながるという思想があった。彼女は、それをうけて、読者を感化するような、「真情」を描写した作品を書きたいと希った。

そうした歌論をそれなりに他の文学領域でも応用する方向は、西洋の文学観などとも結びつけられ、当時の文壇の一つの趨勢でもあった。坪内逍遙も『小説神髓』（明治18年）において、次のように小説論を展開している。

模写小説（アヘチスチック。ノベル）ハ（中略）譬バ詩人が詩歌をものして真景を写し真情をはき画工が丹青をもて花鳥山水を描き彫像師が録をもて人またハ獣の形を彫れるが如く専ら真に逼るを主として（中略）人情世態を穿てるものなり

一葉も『文学界』同人との交友などを通して間接的にはあるが西洋近代思想にも触れながら、歌論に基づく文学思想によって創作に取り組んだと考えられる。もっとも、旧派和歌では、旧態依然として世俗的感覚を離れた温雅な歌風を重んじていた。他方、一葉は、あとで触れるように下層社会での生活も経験した。そのため、おそらく、そうした旧派和歌とはそれなりに異なる独自の内容を「真情」と捉えたであろう。

3. 貧者の苦悩を捉える

一葉は、貧苦のうちに夭折した作家として知られる。兄に続いて父を亡くし、母、妹とともに女3人が残された。一家はたちまち没落し

て生活苦に陥った。収入を得るため、一葉は塾の先輩のひそみに倣い小説を書くことにする。だが、借金に追われ、わずかな原稿料では経済的困窮は増すばかりだった。加えて著作も滞りがちになり、別の収入源として商いを思い立つ。明治26年、貧困層の人々が暮らす下谷亀泉寺町大音寺前、吉原遊郭近くで駄菓子屋を開いた。



一葉女史たけくらべ記念碑 台東区

周知のように、日本の近代化、資本主義化は、日清戦争前後に本格化するが、それに伴う貧困層の増大は社会問題となり、貧民救済の必要性なども説かれ始める。「再暗黒之東京」（松原岩五郎）の『国民新聞』連載開始は明治25年のことである。一葉は、まさに、そうした時期に下層社会に暮らした。ここでの生活が、一葉に貧者の「真情」をみつめさせたはずである。一年が過ぎるころ、一葉は「おもひたつことあり」と日記に記して店を閉じ、再び、しかも一段と精力的に著作に取り組み始めた。

まず、『琴の音』において、松風に琴の音を配する和歌の伝統的イメージを背景に、貧しい少年の非行化と更正とを描いた。少年が盗賊になったのは彼の性情の所為ではなく、周囲の白眼視やラベリングなど、その境遇に

よるものだと描く。一年後の『大つごもり』では、下女として働き、伯父一家のために借金をしようとする少女お峯を描く。奉公先の主人の気まぐれで、約束していた借金を断られ、追い詰められたお峯はお金を盗むに至る。だが、彼女もその性情に問題があって罪を犯したわけではない。その境遇ゆえなのである。

このように、主人公の貧困という逆境に起因する苦悩を描こうとした点は後の名作に継承される。明治28年を中心に発表された名作群では、和歌の伝統的表現を活かしつつ、貧者の「真情」がつつぎと描かれていく。



「たけくらべ」の舞台 大鳥神社西の市

『たけくらべ』では、すでに吉原に身売りされている美登利を始め、将来に展望のない、貧困層の子どもたちが描かれる。『にぎりえ』の主人公お力は、酌婦（売春婦）として身を売る暮らしである。『わかれ道』のお京は、針仕事で一人暮らしに耐えていたが、伯父のために妾奉公することを決意する。一葉はそんな彼女たちの苦悩を描いた。なかでも『にぎりえ』は、明治28年9月『文芸倶楽部』に掲載されると高い評価を得た。たとえば内田魯庵は次のように絶賛した。

『にぎり江』の作者は此売淫婦に対して無量の同情を運ぶを惜まざりし一事にて既に既に少なからぬ感歎を受くるに足るべし。（中略）十分なる讃賞を払ふの価値あるべしと信す。斯くの如きヒューマニチイに富める作家は今の男性作家中にも多くを求むるを得ざるなり。

（「一葉女史の『にぎり江』」『国民之友』明治28年10月）

お力は、「私だとして人間でござんす」と言い、「行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、（中略）つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ嫌だ」と自らの人生に苦しむ。

一葉は、娼婦について次のように書き残している。

これも人也（中略）天地は私なし 万物おのおの所に随ひておひ立ちぬへきを何

者そはかなき階級を作りて貴賤といふ娼婦に誠あり

（残簡 その二 明治27年秋）

下層に暮らす人々に共感した一葉の思いが窺えよう。田岡嶺雲は、「下流の細民と文士」において次のように訴えている。

天下最も其運命の悲惨にして、其生涯の最も憫むべきものは彼の下流社会の徒にあらずや。而して此悲惨の運命を歌ひ、この憫むべきの生涯を描く豈に詩人文士の事にあらざらむや。（中略）作家たるものの満腔の同情を彼等悲惨の運命の上に注ぎ、渾身の熱血を其腕下の筆に瀉ぎて、彼等憫むべきの生涯を描き、彼等不告の民の為に痛哭し、大息し、彼等に代りて 何ぞ奮て天下に懇ふるを為さざる。

（『青年文』明治28年9月）

一葉は、まさに田岡嶺雲が「詩人文士」に向けて呼びかけたことを成し遂げているのである。

4. 女性の生き方を見つめる

一葉自身は未婚だったが、既婚女性を主人公とする作品もいくつか残している。明治28年に『軒もる月』、『十三夜』、翌年には『この子』、『裏紫』（未完）を発表し、5月の一葉最後の小説『われから』がある。これらには、女性の結婚生活を厭う苦悩、生きづらさが描かれている。

『軒もる月』、『十三夜』、『裏紫』の主人公は、相思相愛の男性がいたが、別の男性と定められた結婚をした。『軒もる月』は恋心を封じて夫との生活を選ぶ女性の葛藤を描く。『十三夜』では、かつての恋人に再会しても家族のために離婚を諦める女性が描かれる。『裏紫』の主人公は大胆にも夫を欺き、後ろめたさはあっても自らの愛を貫こうと恋人との密会を続ける。

『この子』と『われから』の主人公は夫との心の隔たりを感じて苦しむ。『この子』では、妻は打ち解けてくれないと夫を恨み、冷たい態度を取る。『われから』では、孤独な結婚生活に苦しむ女性たちが描かれる。お美尾は平凡な夫との質素な暮らしに満足できず一人苦しむ。結局、美貌を武器に華やかな生活を手に入れるべく、夫と子どもを捨てて出奔した。捨てられた子のお町は、富は手にしていても夫に愛されない。心細く不安で寂しい彼女は書生に近づき、不義があったとして夫から別居を言い渡される。

女性は、自らの意志とは無関係に結婚させられ、苦悩し、耐えることを強いられている。一葉は、この問題を鋭く捉え、ただ夫に従うのではない、人間らしく生きたいという女性の思いを訴えようとしたのではない。福澤諭吉は『新女大学』（明治32年）において次の

ように記している。

娘の嫁入は恰も富籤を買うが如し。中るも中らざるも運は天に在り。否な、夫の心次第にて、極楽もあり地獄もあり、苦楽喜憂恰も男子手中の玩弄物と言うも可なり。

女性にとって結婚は「人生のゴール」であり「夫の心次第」なのである。一葉の描く妻たちは、結婚生活を続けるために自らの人生を犠牲にすべきなのかどうかを問いかけていよう。「三従の道」を説く修身の教えに反しても、自己に忠実に、自分らしく生きることを選択しているのではないのか。

一葉は、『にぎりえ』のお力に次のように語らせている。

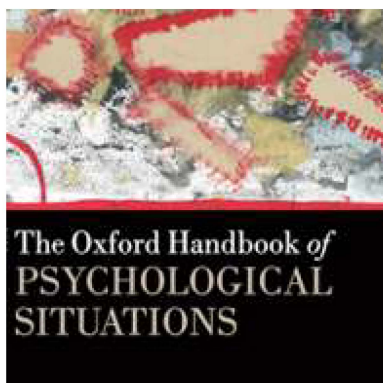
数の中には真にうけて此様な厄種を女房にと言うて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ、そもそもの最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかうらねば恋しいほどなれど、奥様にと云ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは嫌なり お力は、好意を持っていても結婚はしたくないという。これは、のちに、平塚らいてうが「婦人は果して結婚すべきものか」「今日の結婚という観念、ならびに現行の結婚制度には全然服することができないのでございます。」（『世の婦人たちに』『青鞥』第三巻四号 大正2年）と述べたことを連想させる。だが、ゆえにらいてうは非難、攻撃され、揶揄、中傷を浴びせられた。『青鞥』は家族制度を破壊し風俗を壊乱するといった理由で発売禁止や注意処分を受けた。実は、一葉も、こうした反応が予想されるようなことを考えていたのかもしれない。もしかすると、それを横山源之助は「ホノメキ候もの」として聞き取り、時期尚早であると心配したのではないのか。

5. おわりに

一葉は、貧者や女性という社会的弱者の苦悩に共感し、小説にその「真情」を描くことによって理不尽な社会のありようを告発し、変革につなげようとした。近年、一葉文学におけるジェンダーの問題は改めて注目されているが、『青鞥』の活動につながる側面や底に流れる貧困の問題の角度からも、また捉え直したいものである。



樋口一葉終焉の地
文京区西片
（旧本郷丸山福山町）



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 講師

松木 祐馬 (MATSUKI Yuma)

早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻心理学コース博士後期課程単位取得満期退学。博士（文学）。早稲田大学文学学術院心理学コース助手を経て2023年4月に中部大学に着任。専門分野はパーソナリティ心理学。主にBig Fiveパーソナリティ特性とアウトカムとの関連、パーソナリティ特性と状況との相互作用について研究している。その他に、個人差を測定する尺度作成研究にも携わっている。著書（共著）に『心理尺度構成の方法：基礎から実践まで』（誠信書房）などがある。



パーソナリティ特性と状況の相互作用 ——個人差をより診断する状況を探って——

人々の行動は状況からも影響される

「明るい性格の人」と聞くと、いつも明るく振る舞う人たちだと想像しがちになりますが、人々の行動は置かれた状況からも多分に影響を受けます。例えば、明るい性格の人であったとしても、葬式の間では物静かに振る舞うことが大半です。自身の行動が状況に左右されることは中々意識されづらいのですが、人々がどのように行動するかはその人のパーソナリティ（性格）だけでなく状況からの影響も受けて決まります。

人々の行動がパーソナリティと状況の双方から影響を受けるという考え方は、心理学でも古くから指摘されてきましたが、とりわけ状況の重要性を指摘したのがMischelです。Mischel(1968 訃告監訳 1992)は、状況を超えた行動の一貫性を示す実証研究が少ないことを指摘し、パーソナリティのみでは人間の行動の予測や説明には不十分であると主張しました。このMischelの主張はパーソナリティ研究の意義に一石を投じ、パーソナリティと呼ばれるものの実在性をも問う人—状況論争を引き起こしました。

パーソナリティは平均的な行動傾向を説明する

人—状況論争が活発になされる中、Fleeson(2001)はパーソナリティが説明できる観点として、平均的な行動傾向に着目しました。Fleeson(2001)は日常生活で経験される

認知・感情・行動などをリアルタイムで複数回測定する経験サンプリング法を用いて、2～3週間に渡り1日5回、測定時の1時間前にBig Five/パーソナリティ特性と関連する行動をどの程度取っていたかを尋ねる調査を実施しました。なお、Big Five/パーソナリティ特性とは、外向性（積極的に刺激を求め、人付き合いを好む傾向）、協調性（優しく、他者の気持ちを思いやる傾向）、勤勉性（まじめで誠実な傾向）、神経症傾向（感情が不安定になりやすい傾向）、開放性（様々なものに興味を持ち、空想をめぐらす傾向）の5次元でパーソナリティを包括的に捉える枠組みです（John, 2021）。分析の結果、ある一時点の行動傾向と他の一時点の行動傾向との関連はそれ程大きくないものの、測定データ全体を半分に折半し、集積した行動傾向の間には強い関連があることが見出されました。こうした結果を踏まえ、Fleeson(2004)は、一時の行動の説明には状況が有効であるのに対して、平均的な行動傾向の説明にはパーソナリティが有効であると述べています。

パーソナリティ特性の個人差をより診断する状況を探る

パーソナリティ及び状況と人々の行動との関連を検討する様々な研究が行われ、両者が行動に影響を及ぼすことが明らかにされてきています。しかし、パーソナリティ特性の個人差がより生じやすい、すなわち、人々の個人差をより診断する（diagnostic）状況はどのような状況なのでしょうか。また、その個人差の

発現が状況によって左右される程度はパーソナリティ特性の種類で同程度なのでしょう。

これらの問題に取り組んだ先駆的な研究として、Conley & Saucier(2019)の研究があります。この研究では、「一人であるとき」「家族と一緒にいるとき」など29個の状況を取り上げ、その状況において人々がどの程度Big Five/パーソナリティ特性を表出しているかを尋ねる質問紙調査を実施しました。その結果、神経症傾向や外向性の発現は相対的に状況の影響を受けやすいこと、開放性の発現は相対的に状況からの影響を受けにくいことが示されています。他にも、全体的なBig Five/パーソナリティ特性ととりわけ関連しやすい具体的な状況は何かについても示唆に富む結果を報告しています。この研究は人々の行動を説明するに際して、「パーソナリティか状況か」という枠組みではなく、「パーソナリティと状況の相互作用」を積極的に取り上げたとても興味深い研究であると思います。

私はConley & Saucier(2019)の結果や研究手法をととても興味深く思い、同じくこの研究に関心を持っていた研究者に声をかけ、同様の手続きを用いた調査研究を共同で実施しました。本稿の後半ではその調査結果について簡単にご紹介します。

パーソナリティ特性と状況の相互作用の検討

取り上げた29個の状況をTable 1に示しました。まず、パーソナリティ特性ごとに個人差が生じやすい状況を検討したところ、外向性で

Table 1 扱った状況一覧

状況
1. 一人でいる
2. 幼い子どもたちの周りにいる
3. 懇親会に出席している
4. 家（いつも寝泊まりしている場所）にいる
5. 批判されたり非難されたりしている
6. 不当な扱いを受けている
7. 一文無しの（お金がない）
8. 欲望をすぐに満たす機会がある
9. 誰かに手助けを頼まれている
10. 褒められたりお世辞を言われた
11. 機嫌が悪い
12. 誰かと意見が異なる
13. 機嫌が良い
14. (ある状況で) 責任者または管理者である
15. 自分の思い通りにいかない
16. デート中、または恋愛のパートナー候補と一緒にいる
17. 肉体的に疲れている
18. 即決即断することを求められている
19. 慌てたり急いだりしている
20. 買い物をしている
21. 体調が悪い（身体的な不調を感じている）
22. 誰かがあなたを支配しようと試みたり威張り散らしたりしている
23. ストレスを感じている（ストレス下にある）
24. 勉強をしている
25. 誰かに良い印象を持ってもらいたい
26. 見知らぬ人（知らない人）と一緒にいる
27. 家族と一緒にいる
28. 友だちと一緒にいる
29. 働いている（例えば、仕事で）

は「見知らぬ人という」状況で、協調性では「被支配」状況で、勤勉性では「家にいる」状況で、神経症傾向では「一文無し」状況で、開放性では「被支配」状況でそれぞれその特性の個人差が生じやすいことが示されました。例えば、積極的に刺激を求め、人付き合いを好むという外向的な傾向の個人差は、知らない人と一緒にいる状況で最も表出しやすいということですね。言い換えると、外向的な人々と内向的な人々との（外向性という側面での）違いが最も顕著に表れやすい状況は知らない人と一緒にいる状況だということですね。

個人差が表出されやすい状況はパーソナリティ特性によって違いがあるようですが、誰かから支配されそうな状況は比較的共通して個人差が表れやすい状況のようです（神経症傾向の個人差が2番目に生じやすい状況でもありました）。この結果は非常に示唆に富む知見であると感じています。つまり、「誰かから支配されそうになっている」という状況に置かれると、人によって多種多様な反応を起こす可能性が高いということを示唆しています。このことは、権力を行使し、（好んでしようとしたかどうかは別として）他者を支配しようとした人に

とって、その相手がどのように感じ、どのように反応するかは予見しにくいことを意味します。例えば「自分にはできない」「自分には難しい」と陳情する人に対して権力を行使し、無理に仕事を強要することは、自分が想像する以上にその相手に深刻な精神的負荷を負わせている可能性もあるということですね。

状況からの影響の受けやすさをパーソナリティ特性ごとに比較した分析では、外向性及び協調性、勤勉性、神経症傾向の4特性では状況から受ける影響の大きさに明確な違いは見られなかったのに対して、開放性は状況からの影響を受けにくいことが見出されました。この結果はConley & Saucier(2019) と類似しており、様々なものに興味を持ち、空想をめぐらすといった傾向の個人差には、状況に左右されにくいという日米で共通した特徴があるのかもしれません。

状況を特定しない、全体的なBig Fiveパーソナリティ特性と特に関連が強い状況を特性ごとに検討した分析では、パーソナリティ特性によって特に関連の強い状況は異なるものの、共通して強く関連する状況も見出されました。具体的には、「見知らぬ人と一緒にいる」「家族と一緒にいる」「家にいる」「一人でいる」という4つの状況は、パーソナリティ特性の種類によらず、全体的なパーソナリティ特性と相対的に強く関連していました。このことは、上記4つの状況は人々のパーソナリティ特性の個人差をより「診断」する状況であると言えるでしょう。

今後の展望

人々の行動がパーソナリティと状況の双方から決定されるという考え方は、心理学領域では古くから指摘されてきました。例えば、Lewin(1951 猪股訳 1956) は $B=F(P, E)$ という公式でこれを端的に表し、行動(B)は人(P)と環境(E)の関数であると定式化しています。他方で、パーソナリティと状況の相互作用について実証的に行われた研究はそれほど多くありません。この背景には、人か状況かという人—状況論争の活性化のほか、研究方法や分析手法が未発達であったという事情もあると思われます。近年では欧米を中心にパーソナリティと状況の相互作用に関する研究が活発に行われるようになってきていますが、日本では未だ研究が少ないのが現状です。しかし、状況によって表出しやすいパーソナリティ

特性が異なるという相互作用関係は日常場面でもよく見られることであり、研究する意義のあるテーマだと思います。そのため、今後も引き続き検討を続けていきたいと考えています。

パーソナリティ特性と状況との相互作用について明らかにすることは、心理尺度の作成場面においても有益な示唆を与えてくれます。今回の分析では、全体的なBig Fiveパーソナリティ特性の得点と特に関連の強い4つの状況が見出されたわけですが、これら4つの状況はパーソナリティ特性をより「診断」する状況であるという解釈のほか、状況設定を行わない項目から構成される心理尺度に回答する際に回答者が単に「思い浮かべやすい」状況であると解釈することも可能だと思います。人々の個人差を適切に反映できるような心理尺度を考案する上で、状況設定をどのように行うかは重要な検討事項になりますので、回答時の状況設定をどのように行うことが個人差測定に有効かを考える上で有用な知見ともなるでしょう。このように、パーソナリティ特性と状況の相互作用研究は基礎研究の1つとしても重要なテーマであると言えるのではないのでしょうか。

引用文献

- Conley, M. N., & Saucier, G. (2019). An initial broad-level mapping of personality-situation contingencies in self-report data. *Personality and Individual Differences*, 136, 166-172.
- Fleeson, W. (2001). Toward a structure- and process-integrated view of personality: Traits as density distributions of states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 1011-1027.
- Fleeson, W. (2004). Moving personality beyond the person-situation debate: The challenge and the opportunity of within-person variability. *Current Directions in Psychological Science*, 13, 83-87.
- John, O. P. (2021). History, measurement, and conceptual elaboration of the big-five trait taxonomy: The paradigm matures. In O. P. John & R. W. Robins (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* (pp. 35-82). Guilford Press.
- Lewin, K. (1951). Field theory in social science: Selected theoretical papers (Edited by Dorwin Cartwright.). Harper & Brothers. (レヴィン, K. 猪股 佐登留 (訳) (1956). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Mischel, W. (1968). *Personality and assessment*. Wiley. (ミッセル, W. 詫摩 武俊 (監訳) (1992). パーソナリティの理論——状況主義的アプローチ—— 誠信書房)



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程1年

田中 章博 (TANAKA Akihiro)

2002年静岡県磐田市に生まれる。'21年に中部大学人文学部日本語日本文化学科に入学し、本田教授のもとで『竹取物語』について研究する。並行して日本語教員養成講座も履修。'24年にタイのサイアム大学で教育実習を行い、日本語教育について深い関心を示す。'25年3月、中学校・高等学校教諭一種免許状（国語）を取得して学部を卒業する。同年、より詳しく日本語教育について研究するべく大学院に進学し、現在は武藤教授のもとで日本語学習者のカタカナ語の習得について研究をする傍ら、名古屋国際日本語学校で非常勤講師を勤めている。



日本語学習者におけるカタカナ語の習得調査

研究動機

日本語学校で講師をしていると、日本語学習者の多くがカタカナ語を苦手としている現状があることが分かった。日本語学習者が使うテキストでカタカナが使用される場面は外来語や国名に限られ、登場頻度が非常に少ない。試しに担当クラスでカタカナを苦手だと感じるか聞いてみると、およそ9割の学生が苦手だと言った。そんな日本語学習者にとって難しいとされるカタカナ語を習得するのに、学習者の母語が障壁となっているのか調査してみようと考えた。

先行研究

カタカナ語の習得研究の代表的な先行研究として、岡本（1996）と陣内（2007）が挙げられる。

岡本（1996）は、カタカナ語学習の困難さとして、海外学習者は発音や日本語化された表記規則を学ぶ機会が少なく、母語の影響を受けた発音が化石化し、表記にも影響する傾向があるとし、中国人初級日本語学習者を対象に初級段階で2回のカタカナ語の書き取りテストを実施して、定着に要する時間を調査した。結果、ひらがな表記語彙に比べて外来語のカタカナ語彙は確実に定着するのに時間を要することを裏付けた。また、アジア圏の学習者の多くは、カタカナ語に接する際に日本語ではなく教育上馴染みのある英語音を元にした学習ストラテジーを選択することが多いことも明らかになった。

一方で陣内（2007）は、全国の日本語教育機関の学習者479名（うち中国語母語話者が約50%）にカタカナ語学習の困難さに関するアンケートを実施し、結果として中国語母語話者が最も困難を感じ、英語母語話者が最も抵抗が少ないという傾向が確認され、カタカナ語の習得に困難を感じる程度が母語によって異なることを裏付けた。

しかし、こんな研究もある。戸川（2018）は母語に漢字を用いる学習者は日本語を学習する際に漢字への依存度が高いが、カタカナ語の習得は漢字の知識を援用できない点で容易ではないとし、台湾人の日本語学習者56名に中国語単語を英語と日本語（カタカナ語）に訳す課題を実施し実態を調査した。結果、英語ができる学習者ほどカタカナ語ができず、英語ができない学習者ほどカタカナ語ができるということが判明した。戸川はこの結果に、台湾では優秀な日本語学習者ほど英語に苦手意識を持ち、その代替として日本語を学習している動機が強いという教育的事情が影響している可能性があると考えしている。

研究課題

これら先行研究の多くは、漢字圏や英語圏での調査が非常に多く、非漢字圏かつ非英語圏におけるカタカナ語習得に関する調査が少ないことが課題として挙げられる。そこで、非漢字圏かつ非英語圏であるタイ人日本語学習者において、第二言語としての英語の語彙知識がカタカナ語の習得に影響を及ぼしているか調査しようと考えた。

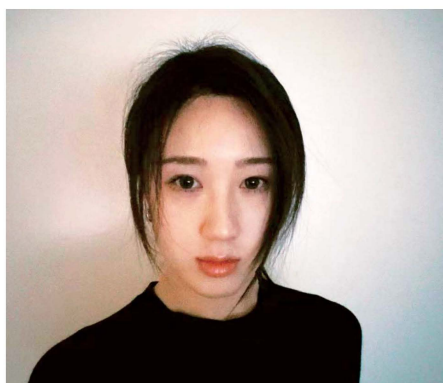
現段階で、3つの仮説を提示する。1つ目は、カタカナ語の多くが英語に由来することから、非漢字圏かつ非英語圏のタイ人学習者においては、英語の語彙知識が多いほどカタカナ語の正答率が高くなる可能性だ。2つ目は、戸川（2018）の漢字圏学習者と違い、英語ができる人ほどカタカナ語の習得が早い可能性だ。これは岡本（1996）を支持する仮説である。3つ目は、英語の語彙知識を持つ学習者であっても、英語と日本語の音韻的・表記的乖離により、カタカナ語の正確な表記の習得には一定の困難を伴う可能性だ。

今後の展望

この3つの仮説を検証するべく、教育実習でお世話になったサイアム大学に協力を求め、戸川（2018）が実施した語彙テストを基に調査を行い、結果を分析し、タイ人日本語学習者におけるカタカナ語の習得に英語の語彙知識がどれほどの影響を及ぼしているか考察していきたい。

参考文献

- 岡本佐智子（1996）「外来語の習得ストラテジー——中国で学ぶ中国人学習者に見る外国語の中間言語——」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』23号、pp97-109
- 陣内正敬（2007）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11巻、pp47-60
- 戸川美恵子（2018）「日本語学習者のカタカナ語彙の習得に関する考察～台湾人日本語学習者への調査を通して～」『別府大学日本語教育研究』8号、pp13-20



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 博士前期課程 1 年

頼 婉テイ (LAI WANTING)

中国浙江省温州市出身。2021 年 3 月に、中国浙江音楽学院音楽教育専攻を卒業。その後、小学校で音楽教師としての経験を積む。2025 年 4 月に中部大学大学院国際人間学研究科に入学。



清末留日学生曾志恣（1879～1929）による『教育唱歌集』に関する研究

はじめに

本研究は、清末に日本へ留学した曾志恣が 1904 年に東京で編纂した『教育唱歌集』を中心に、明治期日本の学校唱歌が中国の学堂楽歌形成に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。27 曲の唱歌と教育理論の分析を通じ、曾志恣の留学経験が唱歌教育にどのように反映されたか、近代日本と中国の音楽教育交流史を再評価し、現代教育への継承可能性を示しながら検討していく。

『学堂楽歌』の定義について

学堂楽歌とは、20 世紀初頭の中国において、新式学校の音楽授業で使用された歌曲を指す。音楽素材のほとんどは、中国の留日学生によって日本や欧米の歌曲の旋律を取り入れ、新たな歌詞が付されている。

曾志恣と『教育唱歌集』

日清戦争後、中国では国家の近代化を急ぐ中で日本が主要な参照モデルとなり、多くの中国人留学生在日本の学校制度や唱歌教育を積極的に学んだ。曾志恣はその中心的な人物であり、1904 年に東京で編纂した『教育唱歌集』は、日本および西洋の旋律を取り入れた中文唱歌を多数収録するとともに、唱歌を通した道徳・情操教育の理念を示した教材である。さらに同書は、学堂楽歌運動における最初期の唱歌集の一つとして、後の学校唱歌の普及に先駆的役割を果たした点でも強調し

たい。

しかし、先行研究の多くは曾志恣の生涯や思想的背景に焦点を当てており、『教育唱歌集』そのものの構成、曲目の特徴、日本唱歌がどのように取り入れられ、どのような変容を経て中文唱歌として成立したのかといった具体的な分析は十分に行われてこなかった。そこで本研究は、『教育唱歌集』に収録された唱歌およびその教育理念に注目し、学堂楽歌形成における同書の意義と日本唱歌の影響を明らかにすることで、この研究上の空白を補うことを目的とする。

現在の研究状況

現在進行中の研究として『教育唱歌集』に収録された唱歌の教材の特徴と日本唱歌からの影響を明らかにすることを目的に、以下の研究を行っている。

1. 歌詞のデジタル化：27 曲の歌詞をデジタル化し、比較・検索可能にして、歌詞表現や教育理念の反映を分析している。
2. 楽譜情報の整理：曲名、調性、拍子、音域などを一覧化し、旋律構造や形式的特徴の分析準備を進めている。
3. 原曲の特定と分析：12 曲の原曲を特定し、日本や西洋の旋律との比較を通じて教育理念との関連を検討している。
4. 留学記録との照合：曾志恣の留学記録と照合し、教材の選曲や編纂方針と教育思想との関係を分析している。
5. 音声資料の確認：現存する日本側の原曲音声を収集し、実際に聴きながら旋律や表

現の違いを多角的に確認している。

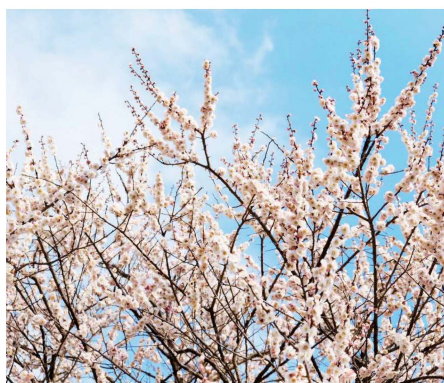
これらを通じて、歌詞・旋律・教育思想の三つの観点から『教育唱歌集』を体系的に分析し、教材の特徴と日本唱歌の影響を明らかにする研究を進めている。

おわりに

『教育唱歌集』は日本の学校唱歌を基に編纂され、中国における日本・西洋音楽の受容と再解釈を示す重要な資料である。歌詞・旋律・教材構造の分析から、明治期日本の唱歌教育が中国近代音楽教育の形成に影響を与えたことが確認できる。本研究は『教育唱歌集』における教育理念の具体化を明らかにした。今後は現代中国の教材と比較し、音楽教育における伝承と変容の過程を検討していく予定である。

引用文献

1. 東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会 2007 『音楽教育の礎：鈴木米次郎と東洋音楽学校』東京：春秋社。
2. 高 娟 2009 『留日知識分子対日本音楽理念的摂取—明治末期中日交流の一側面』北京：文化芸術出版社。
3. 李岩 2021 『曾澤霖志恣考』北京：光明日報出版社。
4. 鈴木米次郎 1901 『日本遊戯唱歌』第三編 東京：十字屋。
5. 鈴木米次郎 1904 『楽典大意』（音楽全書；第 1 編）東京：自省堂。
6. 曾志恣 1905 『教育唱歌集』訂正四版 上海總經售處 開明書店。



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士後期課程1年

杉山 侑姫 (SUGIYAMA Yuki)

次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING) に参加している。現在は、コーパスおよびアンケート調査から得られたデータを用いた言語使用実態の分析と、話者へのインタビューによる質的調査を組み合わせ、ジェンダー包括的表現の使用傾向とその背景を明らかにすることを目指している。



ジェンダーを読み解く英語コーパス研究の出発点

はじめに

1960年代後半以降、英語の中には性差別的な価値観を反映した言葉が含まれていることが指摘されるようになり、それを是正するためのガイドラインが数多く提案されてきた。それに伴い新たに提案された表現がどの程度定着しているのかを具体的に明らかにするコーパス研究が注目されてきた。本稿では、性差別的表現およびジェンダー包括的表現を対象とした英語のコーパス研究を取り上げ、研究者たちが何を分析対象とし、どのような指標を用いて、何を明らかにしようとしてきたのかという点に焦点を当て、その研究の出発点を整理する。

ジェンダーを読み解くコーパス研究の出発点

1980年代後半以降、電子化された大規模コーパスの利用が可能になると、英語のジェンダー表現を実際の使用例に基づいて検討する研究が現れた。初期の研究では、man/woman など性別を直接表す語の出現頻度に着目し、その使用傾向を数量的に捉えることが主な関心であった。Kjellmer (1986) は Brown Corpus と LOB Corpus を用い、男性を指す表現が女性を指す表現よりも多く用いられていることを示し、女性が相対的に話題にされにくい社会的状況を反映しているものとして解釈された。一方で、1960年代から1990年代にかけて女性への言及が増加し、男性への言及が減少していることも報告されており、ジェンダー表現の通時的変化が指摘されている (Sigley & Holmes, 2002)。

その後、研究の関心は出現頻度の比較から、語が用いられる文脈へと広がった。man/woman や boy/girl の共起語を分析した研究では、女性や少女を指す表現に、否定的評価や外見・感情に関わる語がより多く付随する傾向が指摘されている (Romaine, 2000)。

さらに、性別を特定しない場合の代名詞使

用に関する研究も進み、singular they と generic he の比較が行われてきた。Newman (1998) は口語コーパスを用いて singular they の優勢を示し、Paterson (2011) は新聞コーパスの比較から、書き言葉においても singular they の拡大を明らかにしている。

ジェンダー表現に関するガイドラインでは、職業名詞における -man/-woman で終わる語が性差別的であるとして批判されてきた。これを背景に、Holmes と Sigley (2002) は、1961～1990年に渡る複数の書き言葉コーパスを用い、-man で終わる職業名詞の使用頻度が有意に減少していることを示した。一方で、Holmes (2001) は、chairperson/spokesperson といった代替表現が提案されていたにもかかわらず、chairman/spokesman が依然として多く用いられていることを報告している。

敬称に関しても変化が見られ、Holmes (2001) は、1961年に収集された英米コーパスでは、「Ms」の使用例が一件も見られない一方、1986年のニュージーランド・オーストラリア英語の新聞コーパスにおいて、「Ms」が「Miss」を上回っていることを示した。なお、「Ms」は1970年代当時、「忌まわしい言葉」や「肉食的な女性が使う呼称」といった否定的な評価を受けることも多く、既婚女性の中にはその使用をパートナーへの不敬と感じる者もいたと報告されている (Pauwels, 1987)。こうした社会的評価を考慮することで、言語使用の変化という記録を、その時々社会的背景と結びつけて解釈することが可能となる。

まとめ

英語のジェンダー表現を扱うコーパス研究は、性別を示す語の出現頻度や使用傾向を通じて、言語使用に内在するジェンダーの偏りやその変化を明らかにしてきた。しかし、比較対象となるコーパスの年代や地域が必ずしも統一されていないため、観察された差異が時代的な変化によるものか、国地域差によるものか

を判別しにくいという課題がある。2008年に Corpus of Contemporary American English が公開されたことで、年代別に整備されたデータを用いた通時的分析が可能となったものの、統計手法を用いず、出現頻度の表面的な差異に主眼を置いた議論にとどまるものも見られる。以上を踏まえ、今後、年代別に整備された大規模コーパスを用い、言語使用の変化を実証的に検証したい。

引用文献

- Holmes, J. (2001). A corpus-based view of gender in New Zealand English. *Gender across languages*, 1, 115–136.
- Holmes, J., & Sigley, R. (2002). What's a word like girl doing in a place like this? Occupational labels, sexist usages and corpus research. *In New frontiers of corpus research* (pp. 247–263). Brill.
- Kjellmer, G. (1986) "The lesser man": observations on the role of women in modern English writings. In J. Aarts and W. Meijs (eds) *Corpus Linguistics II*, pp. 163–76. Rodopi.
- Newman, M. (1998). What can pronouns tell us? A case study of English epicenes. *Studies in Language*, 22(2), 353–389.
- Paterson, L. (2011). Epicene pronouns in UK national newspapers: A diachronic study. *ICAME Journal*, 35(1), 171–184.
- Pauwels, A. (1987). Language in transition: A study of the title Ms in contemporary Australian society. In A. Pauwels (Ed.), *Women and language in Australian and New Zealand society* (pp. 129–154). Australian Professional Publications.
- Romaine, S. (2000). *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics (second edition)*. Oxford University Press.
- Sigley, R. and J. Holmes. (2002). 'Girl-watching in corpora of English'. *Journal of English Linguistics* 30 (2), pp. 138–57.



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 准教授

三上 仁志 (MIKAMI Hitoshi)

学術博士（名古屋大学）。教育心理学・ポジティブ心理学の視点から、言語学習を自律的なものとするための方法を模索している。近年は、「やり抜く力」と呼ばれる Grit（グリット）の言語学習・教育における役割に焦点を当て、研究を行っている。



人文学部FD・SD講演会

「学び続ける力」を育むには：ポジティブ心理学から考える自己調整学習

FD 講演の概要

昨年末に開催された人文学部FD・SD講演会での内容を報告する。本講演では、大学において「学び続ける力」を育む方法について、ポジティブ心理学と自己調整学習（self-regulated learning）の観点から検討した。ポジティブ心理学は、肯定的な経験や個人特性、それらの発達を促進する仕組みを研究する領域であり、人の強みや成長可能性に焦点を当てる（Duckworth et al., 2005）。自己調整学習とは、学習者が、自らが置かれた社会的状況の中で感情・認知・行動を調整しつつ目標達成に向けて取り組む循環的プロセスであり、ポジティブ心理学と関連が深い。自己調整はどのような学習でも実践可能だが、本講演では、英語学習を例として、その実践例を紹介した。

本講演では、自己調整学習の循環的三段階モデルを取り上げ、その実践方法について説明した（Zimmerman, 2013）。このモデルは、①学習目標を設定し、活動を計画する【予見】の段階、②学習を行い、活動内容を記録する【遂行】の段階、③記録を元に学習の成功・失敗の原因を理解する【内省】の段階を含む。そして、これらの段階は、循環的に繰り返される。

予見段階では、学習者自身に（1）個人的に価値のある目標、（2）その達成に必要な作業、（3）達成までのシナリオを言語化させる活動を行うことが望ましい。

遂行段階では、学習を記録し、学習の成功・失敗とその理由を可視化する。本講演では、

学生自身に簡単な課題管理表（図1）を作成してもらい、彼ら／彼女ら自身の学習に関する理解を深める方法を提案した。

大ゴール：XXX
今週の目標：XXX

	○/×	○/×	○/×	○/×	○/×
タスク1	x(失敗)				
タスク2	○(成功)				
タスク3	○				
タスク4	○				

図1：学生が書く課題管理表の例

図1の左上の【大ゴール】の横（XXX部分）には、長期目標を書き、その下の【今週の目標】に、そのゴールの達成に寄与する週間目標を書く（例：[大ゴール：英語の本を原著で読める力をつける]、[今週の目標：ハリポッター「XXX」を一章分読む]）。【タスク1、2、3…】には、具体的な活動を書く（例：①表現で面白いものがあったら【ノートに書くなどして】ストックしておく、②知らない単語を100語覚える、③知らない・見慣れない文法があったら覚える）。【○/×】には、日付を書く。活動期間中は、スマートフォンのアラーム機能を使い、学習を記録する時間を毎日確保する。例えば、毎晩9時にアラームをセットし、アラームが鳴った際に活動を記録する。活動を達成できた場合は○を、達成できなかった場合は×を、それぞれのタスクの（当日分の）マス目を書く。そして、達成・不達成に限らず、その横に一言メモを書く。不達成の場合、不達成の理由がメモの内容となる（例：バイト終わりに活動をしようと思ったが、疲れていて出来なかった）。達成の場合、①改善可能な点や②自分が使った戦略の有効性をメモする（例：読みながら表現をメモすると集中が切れるの

で、面白い表現には消せるペンで線を引きつつ読み進めて、ノートは後でまとめる）。

内省段階では、1週間分の①一言メモと②タスク達成率（例：50% = ○が、図の半分で付いている）を参照しつつ、その週の学習活動の成功・失敗の理由を理解する。長期間に渡って内省を行うことで、学習の進捗と改善点が明確になり、メタ認知（自分の知識についての知識）が高まる。メタ認知が高まるにつれ、学習を自分に合った形・継続可能な形にすることが容易となる。

講演のまとめとして、自己調整学習が進むことで学習効率が向上するだけでなく、達成感から学習動機と自己効力感（Graham, 2022）の向上が見込めることを説明した。

引用文献

- Duckworth, A. L., Steen, T. A., & Seligman, M. E. P. (2005). Positive psychology in clinical practice. *Annual Review of Clinical Psychology*, 1(1), 629–651. <https://doi.org/10.1146/annurev.clinpsy.1.102803.144154>
- Graham, S. (2022). Self-efficacy and language learning-what it is and what it isn't. *The Language Learning Journal*, 50(2), 186–207. <https://doi.org/10.1080/09571736.2022.2045679>
- Zimmerman, B. J. (2013). From cognitive modeling to self-regulation: A social cognitive career path. *Educational Psychologist*, 48(3), 135–147. <https://doi.org/10.1080/00461520.2013.794676>

第23回「院生の力」を開催

第23回「院生の力」研究報告会が2025年11月5日（水）に開催された。院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうことが主な目的である。また、指導教授がコメンテーターとして議論に参加する形式をとり、院生の研究能力を高める場としても位置づけられている。

今回は国際関係学専攻と言語文化専攻の博士前期課程所属の院生2名（頼婉婷氏、田中章博氏、欠席者1名）が発表をおこなった。テーマは、「清末留日学生曾志恣（1879～1929）による「教育唱歌集」に関する研究」と「日本語学習者におけるカタカナ語の習得調査」である。双方とも興味深い発表であり、これからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。

参加者は合計31名であった。質疑応答も活発になされ、たいへん盛り多い報告会となった。また、報告会終了後には交流会が開催され22名の参加があり、院生、教職員との交流ができ大盛況であった。



大学院 国際人間学研究科 主催

第23回研究報告会

院生の力

大学院生が、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

2025年11月5日（水）15時20分～16時50分

2512 講義室（25号館1階）

※終了後、交流会を開催予定。

第1報告 ライ ワンティ（国際関係学専攻 博士前期課程1年）

発表題目：清末留日学生曾志恣（1879～1929）による「教育唱歌集」に関する研究

コメンテーター：宗 ティンティン 准教授（国際関係学専攻）

第2報告 田中 章博（言語文化専攻 博士前期課程1年）

発表題目：日本語学習者におけるカタカナ語の習得調査

コメンテーター：武藤 彩加 教授（言語文化専攻）

第3報告 磯部 高宏（心理学専攻 博士前期課程1年）

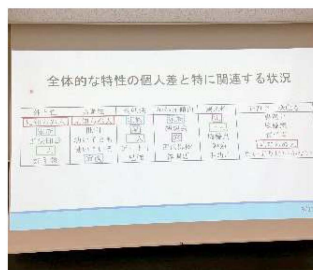
発表題目：物語におけるステレオタイプ表現の役割と影響

コメンテーター：松木 祐馬 講師（心理学専攻）

第24回教員研究会を開催

第24回 国際人間学研究科教員研究会は、2025年11月26日（水）の研究科委員会終了後に2人の発表者を迎えて開催された。まず、言語文化専攻日本語日本文化コースの愛知峰子教授が「樋口一葉文学の世界」と題する発表を行った。氏は樋口一葉が「真情」の描写を創作理念とし、下層社会での生活経験を通して貧者や女性の苦悩に共感的に向き合い、社会の理不尽さを告発した作家であることを紹介された。

次に、心理学専攻の松木祐馬講師が「パーソナリティ特性と状況の相互作用 一個人差をより診断する状況を探って」と題する発表を行った。氏は人の行動がパーソナリティ特性と状況の相互作用によって決まることを報告された。Big Five特性は平均的行動傾向を説明し、特定の状況では個人差がより顕著に表れるという。詳細は本冊子の2ページと4ページから始まる報告をご参照されたい。お二人の研究者による知的刺激に満ちた発表のあと、活発な質疑応答が行われた。参加者は合計27名（教員25名、事務員2名）であった。



資料12

中部大学国際人間学研究科 主催

第 24 回教員研究会

2025 年 11 月 26 日（水）
研究科委員会終了後（17 時 45 分頃～）
2821 講義室（28 号館 2 階）

愛知 峰子 教授 言語文化専攻
樋口一葉文学の世界

松木 祐馬 講師 心理学専攻
パーソナリティ特性と状況の相互作用

院生・学部生の来聴を歓迎します。

63

分野・入試情報

博士前期課程・後期課程 分野・コース

中部大学大学院国際人間学研究科では「国際」と「人間」をキーワードに、グローバルとローカルの2つを軸足として活躍できる人材を育てています。具体的には以下のような国際関係、国際政治・経済、国際社会・文化、言語、言語教育、メディア、心理、歴史、地理などの分野で、約60名の教員が指導学生の学位取得に向けて全力でサポートします。全ての分野に博士前期課程・後期課程があり、両課程とも以下のような専攻があります。指導教員の専門分野、奨学金、研究支援費、海外研修、指導教員候補への連絡方法などについては、ウェブページをご覧ください。国際人間学研究科事務室（chubu-inkn@fsc.chubu.ac.jp）までお問い合わせください。

専攻	分野	専攻	分野
国際関係学	国際政治経済研究	心理学	心理学
	国際社会文化研究		歴史学
言語文化	情報社会	歴史学・地理学	地理学
	英語圏言語文化		
	日本語日本文化		

入試情報

試験日程は10月と2月です。一般試験、社会人試験、留学生試験の3種類があり、基本的に、書類審査、筆記試験（専門科目・外国語能力を含む）及び面接試験による総合評価で合否を判定いたします。詳細は、右のQRコードより中部大学大学院入学試験要項をご覧ください。2027年度の情報は随時掲載していきます。入学試験要項および各種提出書類（研究計画書、論文要旨等）は、ウェブよりダウンロードしてください。各試験はインターネットによる出願となります。



入学試験要項



研究科総合情報



申請書類



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋して、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/健康心理学特論/認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/心理検査法特論/心理統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

情報社会コース

研究基礎(情報収集、メディア・クリティシズム)/現代社会特論/情報社会特論/情報文化特論/現代メディア特論/情報コンテンツ制作特論/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通科目

近代世界表象体系

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

情報社会専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通科目

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

※各専攻での深い学修に加え、高度な俯瞰力や豊かな人間性を備えたリーダー人材の育成を目指した「持続社会創成教育プログラム」を入学時に選択することも可能です。

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：塩澤 正
 - 発行日：2026 年 2 月 26 日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200
 - 中部大学国際人間学研究科(人文学部事務室)
 - 電話：0568-51-4144(直通)
 - 電子メール：chubu-inkn@fsc.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページ：
<https://www.chubu.ac.jp/academics/graduate-global-humanics/>